

「真夜中の少女たち～誰か私を助けに来て～」を見て

TVで「真夜中の少女たち～誰か私を助けに来て……～」を視聴した。夜の新宿界隈で、ネットチャットの疑似恋愛で月70万円近く稼ぐ少女たちや、携帯援助交際サイトで稼ぐ少女たちの実態のドキュメンタリー番組であった。

取材に応じる10代の少女たちの口からは、「親にお前を生まなければよかったと云われた」とか、「親から暴力を受けた」とか、「人は簡単に裏切る。お金は裏切らない。」の言葉が…。

自分の心の居場所がなくなり、家出して自分で生きる稼ぎの場として、夜の雑踏の中での生活へ……。

だが、取材からは、少女たちは心の孤独と絶望感を抱きながらも、「誰か私を助けに来て……」と叫んでいる。

番組の中では、少女たちをルポする女性との出会いと交流から、一般商店の採用面接試験にチャレンジして行く少女の姿もあった。

自分の一つの属性である「女」を売りにし、日々多額の金額を稼いで生きることができて、一人の人間としての自分という全人格的、包括的存在として、係わってくれる人との出会いを待ち望んでいるということか……。

一方、最近の家族殺害事件の10代の少年、少女たちも、家出はしないが、やはり同じような心の居場所のなさが起因しているとも思える。

彼らも事件を起こす前には、「誰か私を助けに来て…」と叫び続けていたのでないだろうか。

こうした事件が報道される度に、直ぐに「10代の心の闇は解らない」というコメントを耳にするが、そんなに彼らの特異視するのではなく、心の居場所という視点からの検証が必要なのではないかと思う。

何も彼らに限らず、我々として思考回路が蟻地獄に入ると、時に何もかも投げ出したくなることがありますよね。

ただ、我々は色々な生き方や価値観という、蟻地獄から這い上がる術を知っているが故に、辛うじてブレーキがかかるだけの話かなとも思う。

心の居場所のない状態とは心的に緊張状態であり、この状態が日常化し、彼らのように蟻地獄から這い上がる術が乏しく、また、手を差し伸べてくれる人が身近に居なければ、その自分に緊張をもたらす空間そのものを壊そうとするのも、心というものの成り行きかもしれない。

こうした心の居場所の視点からこそ、彼らの心の孤独と絶望感に近づくことができ、彼らの心の居場所と成り得る身近な大人としての日頃からの係わり合い方のヒントが見えてくるのではないだろうか。